

中国社会史の立場から —漢族社会における婚姻関係

上 田 信

私は去年まで留学生に日本事情を教える授業を担当していた。そのときに、日本思想史の研究で中国の天津から来た留学生が、どうしても理解できないことがある、説明してほしいと問いかけてきた。中江藤樹の伝記を読んでいたら、「彼が祖父の養子になった。それはどうしてもおかしい。中国では考えられないことだ」という。私は「輩分」という考え方が日本には全くないのだと答えたが、「輩分」というものがないこと自体が、中国の留学生には感覚としてつかめないらしい。「輩分」という感覚は、今現在の中国においても十分に生きているということとを非常に強く実感した。

「輩分」は元々日本語にも、考え方そのものも日本にはない。簡単に言えば、父系の共通の祖先として認めた人物を第一代と数え、第何代目かという順番である。中国を特色づける宗族というものが、輩分を軸にしながら展開してきた。日本文化は儒教の影響を受けたと言われながら、宗族の一番根幹である輩分という概念は、全く日本に入っていない。日本は儒教社会だと一方で言われながら、実態は儒教の本質的な部分を全く受け入れていないことがよくわかる。

私は『伝統中国』（講談社、1995年）という本の中で、父系の宗族集団における「輩分」の展開を論じてきたが、その反省として、中国の宗族や社会を扱う際に、女性は完全に抜け落ちてしまいがちだったと思う。今回の報告は、女性を含み込もうということから、婚姻関係を一つの接点として考え、宗族と女性の問題を考えていきたいと思っている。

『伝統中国』の中では、中国浙江省の山間地域のある盆地を取り上げ、その中の開発と定住の過程で人間関係がどのように形成されていったかをなるべくダイナミックに捉えようとした。この問題は、大学院の修士論文を書く頃からずっと扱っていたが、どういう形で中国の親族関係を捉えていくのかは掴みきれていなかった。その中で色々と族譜を読んで明らかになってきたことは、中国の同族集団の中で一番重要なポイントは、「尊卑長幼」の序列ではないかということだった。尊卑とは輩分の高い、低いという上下関係であり、長幼とは同じ輩分の中での年齢序列になる。同族集団に属した人間は、尊卑長幼という一つの基準によって、ある種の序列が非常に重要視されていることを感じた。

これはいわゆる儒教的なものが現実化されたという理念的なものではなく、実生活の中で様々に影響してくる。例えば、宴会の場においては、上座から順に席次がある。宗族の集まる宴会の席に入るときに、お互いに席を譲る儀礼的なやりとりがあるが、最終的にはある一定の席に決まっていく。一つの序列を共有していることによって、秩序が作られていくように思う。

この宗族集団は、子供の頃からそういう場に身をおくことで、秩序意識を無意識のレベルまで身体化していく。

例えば、同族集団がかなりの比重を占めている中国の村落では、挨拶にも輩分が意識されている。序列が下の者から先に相手側に挨拶の声をかける。それも親族呼称によって呼びかけをしなければならない原則がある。それに対して序列の高い者は、相手の名前をそのまま呼んでもかまわない。名前をお互いに呼び合うことが挨拶になる。序列の高低を自動的に認識し合う形で人間関係が成立している。その序列をどう再生産していくのが、宗族集団にとって一番重要なカギになるのではないか。

中国の場合、その序列を共有化することによって、同族集団の範囲がまさに可変的に変わっていく。その時々を経済的、政治的な状況に応じて、同じ姓であれば同じ同族だと認め合い、族譜を一体化して大きな集団にまとまっていく動向が非常に強く見られる。それは華南だけではなく、浙江省の山間地域においても見られることである。

中国では「輩行字」という輩分を明記するための名前の付け方がある。例えば二文字の名前であれば、その最初に決められた漢字を使い、その世代の輩行であることを示す。特に有名なのは孔子の一族で、80代ぐらい先までの輩行に使う漢字が決まっている。

輩行を表す漢字を共有化することで、同族だという意識を認め合う。それが共有化されていく範囲を調べてみると、同族がいくつかの地域に分かれて住んでいても、ある時代からお互いに連携を取って進んでいくことがわかった。そのときに東南アジア研究との接点が私の念頭に浮かんだ。はじめ私はその関係を最初にネットワークと呼んでいたが、東南アジアの人類学を研究している人から批判を受けた。東南アジアの人類学的な研究の中では、ネットワークとは二者関係のつながりで捉えるものであり、組織間のつながりをネットワークとして捉えていいのかという問いかけがあった。

日本人は箱型の組織を中心に動いているために、そこからはずれる関係は全てネットワークとして捉えてしまう傾向がある。日本の感覚とも、あるいは東南アジアで言われているネットワークという感覚とも違う言葉を新たに作らなければ、中国の状況は捉えられないのではないかと考え始め、中国的な人間関係の広がりやをチャネル(回路)という言葉で表現することにした。

もう一つ気付いた点は、今までの日本の研究者は常に「日本対中国」という形で中国を捉えていたということだ。日本にないものを中国に見い出し、中国にないものを日本に見い出すという形でしか中国を捉えられない。そのために非常に平面的な捉え方になってしまう。中国を

見るためのもう一つの視座が必要だと感じ、「伝統中国」という本の中では、タイと日本をおくことによって、三角測量という形で中国を立体的に見ることを試みた。そうすれば、日本の姿も立体的に見ることができるだろう。

そこで議論を進めていく中で、親族関係におけるタイ、中国、日本の違いを要約してみた。それがタイの動詞的關係、中国の形容詞的關係、日本の名詞的關係というものだ。中国の親族関係は、お互いにまず同類であることを認め合うところからスタートする。同じ姓を名乗り、共通の祖先から辿って何代目かということが一つの基軸になってくる。しかし同類であることが平等であることではない。同じだということを認め合った上で、上下関係という差異を認めていく。尊いか卑しいか、あるいは年齢が高いか低いかという、形容詞的な指標によって序列が形成されてくる。このような社会が、中国の宗族関係と捉えることができるだろう。

タイの場合には具体的な人間関係、まさに二者関係が非常に重要になってくる。親が子供にしてくれたことに対して、子供は親に対してどうするかという関係になる。例えば土地の問題でも、親が子供を畑で働かせることで、具体的な関係ができてくる。様々な儀礼の場においても、誰に対しての儀礼かによって、集まる人々の範囲は変わってくる。まさに誰のために何をするかという形の親族関係だと思う。何かをし、何かをして返すような、動詞的な関係と言えるだろう。

中国の場合には、同じ同族内で行われる儀礼であれば、誰に対する儀礼に関わらず、集まる人々の範囲にそれほど大きな差はない。あるいはある一定の範囲の中から決まってくる。そこに中国とタイの違いがある。

日本場合は入れ箱型で、何々家の人物だというような家督というものに結びついている。名詞的なものに帰属するか帰属しないかという形で、その親族の関係範囲が決まってくると言えるだろう。この名詞的な関係と中国の形容詞的な関係をどう分けるかが問題になるかもしれない。中国の場合には、親族が共通の祖先から別れて出ていく場合、同類だということを認識しながら分かれていく Segmentation という形になる。日本では、分家は本家とは家格も役割分担も全く違うという、まさに差異を強調する differentiation という形での分化だ。その差異を示すものとして、様々な名詞がその上に積み重ねられて、親族の大きな集団へと発展していく。

さらに中国の場合、おそらく中国哲学を考える際のキーワードである「気」という言葉が、同類意識の理解には重要になる。共通の父系の祖先から、同じ「気」を受け継いでいるという感覚を持っている。「気」は骨を通して親から子へと伝わる。父親の骨が子供の骨に感応する

ことで、「気」が世代を超えて伝わるような認識がある。「気」を共有することで同類だという意識を持ち、それをベースにして、形容詞的な差異による秩序を作り上げていく。

そういう関係が、最後にはどのように国家という大きなものと結びついていくのか。そこに問題の焦点が移っていくことになる。私の出版とときを同じくして、山田賢さんが移住民に着目した議論を展開している（山田賢『移住民の社会』名古屋大学出版会、1995年）。その中で婚姻関係が親族関係と同時に重要なのだという指摘がある。

山田さんの研究は、17世紀から始まる三省交界地区（秦嶺山脈及びその南の山間地域で、湖北省、陝西省、四川省の省境が接している地区）での移住を扱われている。18世紀の末、その地域に大量の移民、定住という現象が進んだ。移住したばかりの混沌とした状況から、一つの地域社会が形成されてくる過程を焦点に議論が展開されている。

最初に移住してきた人達は、まず出身地を共有する者の間に人間関係を作っていく。中国の場合、話し言葉は非常に多岐に及んでおり、出身地が異なれば言葉も通じないことがありうる。まず言葉が通じる者同士が連携するのは当然だろう。交易地において同郷会館を設立し、それを軸に中国全体の同郷のつながりを結んでいく。その中で特定の商品を扱い、独占することによって、商業権と同郷というつながりができることになる。次第に交易や開発の要所所に、同じ地域出身者による同郷村落が形成され、そこでは共通の言葉によって日常生活が行われていく。次第に人数が多くなるに従い、宗族的な結合を作り上げ、輩分を軸にした人間関係を形成することになる。

その同郷集団がいくつかの村落に分かれている場合、別の村に住む同じ地域出身者と通婚関係を結ぶことが多い。だが同郷出身者であれば誰でもいいというわけではない。同じ輩分の代である「輩行」をシンクロナイズさせる努力をかなり行っている。例えばA村の12代目の人が、B村の11代目の人を嫁にとった場合、B村の11代目の人がA村から嫁をとるときには、必ず12代目の輩分に属する女性を嫁として迎える。同族ではないにも関わらず、嫁のやりとりで輩分を非常に意識する。おそらく同じ時期に一斉に移住が行われ、輩分のシンクロナイズがそれほど困難ではない状況があるからだろう。

正式な中国の史書には、このような慣行は全く記されていない。しかし、実際のフィールドワークでは、通婚関係の中で常に輩行を一致させていこうとする傾向が、非常に強く見られる。三省交界地域に限らず、山東省でも報告されているし、古くは華北の農村慣行調査でも報告されている。特に同じ村落や、ある一定の地域に住んでいる人達は、同族でないにも関わらず、輩分のずれた婚姻関係を避けようとする。このような通婚関係を濃密に結ぶ同族グループ間で

輩分は共有化され、同調化していくことになる。通婚関係の中でも輩分は重要な意味を持つことが窺える。

先述したように、中国の村落では、挨拶によってお互いの上下関係を認識し合う。それは子供時代の養育の中で、既に教育は始まっている。現在においても学校に入るような年齢になると、上下関係を意識させ、それを間違えると親が強く子供を叱るようになる。親が同族の人に挨拶を交わすとき、連れてくる子供にも親族呼称による呼びかけを教え、おじぎさせている光景がよく見られる。非常に複雑な親族呼称も、実地教育を重ねて教え込んでいくことになる。

これは子供の世界にまでも入り込む。歴史深度が長い同族村落の場合には、同程度の年齢であっても輩分が異なることが多い。例えば25代目の子が6歳で、23代目の人がまだ4歳という逆転現象が当然のようにある。小さな頃は遊び仲間であっても、就学年齢になれば、輩分による序列意識が植え付けられ、正式な場では親族呼称で挨拶を交わさねばならない状況に置かれてくる。

このような子供の世界を観察していると、中国の村落の中では、小さな子供達が群れて遊んでいるのに対し、小学生以上の子供は遊びのグループを形成していない。ガキ大将の存在も見られない。遊び仲間の中に上下関係が外在的に持ち込まれたのでは、一緒に遊んでいてもおもしろくないのだろう。正式の場では、自分より輩分が上の子供に対しては頭を下げなければならない。このような状況ではガキ大将も育たない。

同時に、その頃から子供の中における男女の区分も明確に出てくる。「七歳にして席を同じゅうせず」という言葉があるが、中国的な儒教のベースになるような生活レベルでの教育が始まる。女性の場合はその頃から非常に厳しく親に管理され、近代以前においては、纏足が施されていく。このような形の中では、中国の村落社会における子供の遊び集団、あるいは男女の闊達な人間関係は育っていかない。

去年、ナコンパトムという中部タイの村落で、簡単な農村調査に同行した。そこでは、中国とは対照的な子供達の遊ぶ風景が見られた。我々の子供時代の記憶と重なる部分もある。夕方の5時頃になると、子供達が一斉に村の広場で遊び始める。色々な年齢層の子供が、同じ広場で色々な遊びをしている。その外側に小さな子供の親たちが、おしゃべりをしながら子供を目の端で追っている。子供の遊びを中心としながら、村落の夕刻の場が展開している印象を受けた。

このような格差を目の当たりにして、中国の社会史においても、子供の遊びから明らかにすべき問題があるだろうと強く感じ始めている。中国の場合、おもちゃについても非常に貧弱だという印象を強く受ける。清末の人の伝記でも、子供の頃に遊んだという記述はあまり見られない。子供の頃にヨーロッパのおみやげとしてボールを渡されたが、その遊び方が全くわから

なかったと書かれた自伝もある。ボール遊びという発想ができないような子供時代が、おそらく中国では一般的だったのだろう。

さて、輩分を維持する面では、婚姻関係はある種の危険を冒すことになる。婚姻によって夫婦は同じ序列に考えられる。同族内で16代目の男子と18代目の女子が結婚すると、親族の輩分の序列に混乱が生じてくる。輩分の序列を混乱させないためにも、輩分を共有している範囲の中での婚姻を避ける意識は非常に強く働く。それは不道德という観念ではない。安定的に秩序づけた序列が乱され、村の秩序を壊し、日常レベルでの呼びかけの言葉までもが混乱することを回避するという性格が強い。そこで密接な婚姻関係が行われてる場合にも、輩分を一致させる努力がされるようになる。

また、同族村落の中での婚姻も成り立ちにくい。予想される混乱を避けるために、なるべく遠くから嫁を迎え入れる傾向が非常に強くなる。今の漢族の村落でも、同村内での通婚のケースは少ない。現在では工場などの同僚や、郷というレベルでの見合いが多い。同じ郷であっても、少しでも離れたところと姻戚関係を持とうとする傾向が強く見られる。

村の中で工場をおこした場合でも、同族から人を入れると、工場の人間関係と宗族関係が入り組んでやりにくい。嫁や妻の縁故で採用してくる場合が多い。同族の形容詞的な人間関係による柱と、女性を介した動詞的な関係が社会を支える形で進んでいる。

タイのナコンパトム県の元村長は、祖父が中国人だったという。米の商人としてその村を出入りしていたが、村の女性との結婚を契機に住み着いたらしい。その頃は中国と人間関係でつながりがあったが、その次の代からは漢族としてのアイデンティティは失われていく。一代目が亡くなると、もう中国のどこから来たのかという記憶さえ伝わっていない。三代目の元村長になれば、そんなことは人生にとって重要な問題事ではない。それよりも、婚姻した家が村内における有力グループをなしており、姻戚関係が彼を村長にさせる一つのバックボーンになっていた。

タイの村落で聞き取りをしていると、幼なじみ同士で結婚する事例が多い。子供の頃からの自然な人間関係が、結婚に結びついていく。このような現象は中国では見られない。このような自然な人間関係は、輩分を維持するために抑圧されていく。漢族がタイの農村のような自然な人間関係に基づく社会に移住したとき、漢族の持つ呪縛から解き放たれる。それと同時に、漢族としてのアイデンティティも失っていく傾向が見られるように思う。

ネットワークや、中国のチャネルという関係、あるいはそれぞれの社会における婚姻や男女の関係、東南アジアに移住した中国人のアイデンティティ形成などが、おそらく東南アジアと中国、中国人を考える際のカギになるのではないかと考えている。

コメント

阿 部 健 一

親族関係に注目した精緻な議論に対して、同じレベルでコメントを加える学問的バックグラウンドはない。東南アジアと比較しての中国に対するおおざっぱな印象のみを述べさせてもらう。

この時、比較の相手として東南アジアで意識しているのはマレー世界である。上田さんは、中国、日本という従来の2者関係を軸とした比較から、さらに踏み込んで、タイを取り上げ、その3者比較から中国を立体的に浮かび上がらせようとしている。社会構造に関しては、エンブリーの日本とタイを対比させた先行研究もあり、きちっとした基準軸の上で中国・日本・タイ(東南アジア)と比較できるのだろう。実際、今日お話になったタイの動詞的關係、中国の形容詞的關係、日本の名詞的關係という親族関係の類型も綿密な比較研究の賜であろう。

一方、マレー世界を相手にもってくると、おそらくあまりしっかりとした比較の枠組みはできないだろうと思う。しかし、マレー世界が、立本さんの言われるように「東南アジアを代表する、社会の典型であり理念型である」とするなら、東南アジアの理念型と中国(あるいは漢族)の理念型を、もはや比較とは言えないが、つきあわせて考えてみると何か見えてくるかもしれない。

輩分という考え方を今日はじめて聞いた。共通の父方祖先から起こして何番目にあたるか、その上下関係のなかで序列が決まってゆく。尊卑長幼、自分がこの秩序の中でどの位置を占めているかはもはや身体化されているという。血族関係を軸とした上下の明確な整序感覚、これはマレー世界とははるかに遠いものだ。

ここで思い出されるのが、人類学者ヴィヴィアンのマレー研究だ(Viviane Wie 1985, *Melayu: Hierarchies of being in Riau*)。彼女はフィールド調査の場所選定にあたって、人に会うごとに、もっとも伝統的な所、マレー世界の中心に案内してくれと頼む。典型を調査したかったわけだ。しかし、だれも「そのなものはない」という。それではいったいマレーとはなにか、マレー人であることはどういうことなのか、というテーマが据えられる。そして結論として、マレーとは、マレー世界のヒエラルキーの中に自分のニッチを見つけて入り込んだ者であり、出自とかは全然重要でないということである。ヒエラルキーというと、上下関係が明確なようだが、ヒエラルキーの編み目は一つではなく様々に重なりあっており、関係は伸縮自在であり、状況的・流動的である。漢民族が輩分というしっかりとした鎖で祖先まで自分の出自をたどり、自己を定位させなければならない

のとは対照的である。マレーはいわば自己申告制であり、どこの誰かわからないものでも、「俺はマレーだ」と言えば、それですでに「秩序」に組み込まれたことになる。そういったものを秩序と呼んで良ければだが。

では、こうした社会構造がそれぞれどのような世界を形成するのか。それは、一方は上田さんの本のタイトルにある「伝統」中国であり、かたやマレー世界は、伝統を生成しえない世界である。

今日の上田さんの話の中で、漢民族の移住の話があった。お互い言葉も通じ合わないような多様な人の集まりの中から、まず同郷であることで寄り合い、やがて宗族的な結合を作り上げ、最後には輩分を軸に秩序体系を作り上げてゆく。まさに「伝統」が生成されてゆく過程である。伝統というのは過去の体系だった積み重ねであろうが、中国の場合は輩分を柱に、いとも簡単に、移住地のような混沌の中から再構成できるようだ。

マレーはこの体系だった過去の蓄積のできない世界だ。前に東南アジア研究センターの客員研究員であったヘンク・マイヤー氏が、マレー世界は永遠に混沌であり、伝統のできない世界だと述べたことがある。伝統というものはなく、それは過去におこった何かにすぎない。過去にはいろいろなことがおこった、その過去の出来事はバラバラに秩序なく存在、あるいは記憶に残っているだけで、それを順序正しく整理する、そのような機構というか鋳型というかはマレーには存在しないようだ。中国で、輩分のみがこのような伝統生成のシステムであるかどうかかわからないが、少なくとも社会構造の面の非常に象徴的な考え方だろう。

輩分という伝統生成システム、そこからはずれたときに、漢族は解放感とともに、喪失感も味わうという。東南アジアに來ている華僑が、どの程度この呪縛から逃れてきているのか、あるいは縛られ続けるのかよくわからないが、中国という地域は秩序を否応なしに形成するシステムの内在した地域のように、東南アジアを含めた中国の周辺地域が、中国に生得的とも言える恐怖をいただくのは、システムに組み込まれて、逆に周辺が自己のアイデンティティを失っていくことに対する恐怖かもしれない。

最後に今日の親族関係とは別の秩序感に簡単に触れておきたい。

輩分はいわば時系列に沿った時間的身分の固定化であるが、空間的固定化も中国では強く意識する。今でも町戸籍と村戸籍とはっきり分かれて、村から町への定住を厳しく制限している。中国の支配層は人を地に縛りつけ固定さすことに、かなりの力を注いでいる。地に張りつく農が卓越する中国と開放系である海域世界であるマレー世界の生態的基盤の違いによるものだろうが、空間的にも時間的にも人を固定化し、伝統を生成してゆく中国と、人が自由に社会秩

序に組み込まれたり距離を置いたり、さらにその秩序自体も上下関係も状況的で中心すらも移りゆくような伝統の蓄積のできないマレー世界とが対比が可能である。

質疑応答

上田 私もマレーに一度行ったことがある。通過しただけのような滞在だったが、チャイニーズネスを痛感することがあった。ホテルのフロントに英語で苦情を言っても全く対応してくれない。だが中国語で話せば、すぐに対応してくれた。ホテルの中心的なところは、全て中国系の人達が占め、まさに商業が中国系で固められているという印象を受けた。

華僑研究では、自分自身がチャイニーズネスだと主張する人達の話を知っている。それで非常に強烈なチャイニーズネスが全面に出てくるのではないかと。だが東南アジアに行った中国人、特にその第二世代以降は、常に現地社会に同化される力を身に感じながら生きている。タイの農村の場合で紹介した元村長という老人も、完全に自分はタイ人だと自覚している。見た目も生活習慣も区別できないぐらい同化している。華僑研究では、そういう人達の実態までは調査できてはいない。

逆に言えば、東南アジアで自分を華僑だと主張する人達は、チャイニーズネスを強烈に前面に押し出さなければいけない状況に置かれているのではないかと。あるいは、ことさら前面に押し出すことで、ようやくチャイニーズネスを維持している。もし宋代以降に流れ

ていった人達の子孫を完全に調べあげることができたなら、全く違う側面が見えてくるだろう。完全にタイ人やマレー人になってしまっている人達がいる。そのような中でも、華人だと名乗り続けるという人生の選択がある。華人や中国系の子孫が、すべてチャイニーズネスを強く押し出すのではない。おそらくその逆が実態だろう。その人が生きている世界の文脈の中で、何を押し出すかという問題だろう。

もう一つ「伝統」ということが重要なポイントになっていたが、「伝統中国」という本は、元々「生成する伝統中国」という表題を考えていた。今までの歴史研究の中では、まさに黄河から始まる「伝統」があるとしている。だが、華南の族譜を研究していくと、今彼らが生きている場が重要なのだとわかる。その中で激烈な競争が行われている。移住の問題や、商業権の奪い合い、婚姻政策のような激烈な競争が行われている中で、自分の場をいかに確保するかが重要なのだ。自分達が現状の中で優位を占めるために、過去を生成し直す作業が延々と行われていく。まさにその作業の結果、あたかも本当に昔からあったかのように「伝統」というものが作り上げられていく。

これは、マレーの人達が現在を重視することと同質だとも言えるが、過去を自分の戦略の中に取り込んでいくあり方が違ってくる。

祖先を過去に遡らせるほど、同族だと認め合う人達の範囲は格段に広がる。なるべく過去へ先祖を遡らせていく戦略が、非常に有効になってくる。同族の内部は当然一枚岩ではなく、熾烈なトップ争いや、様々な対立がある。だが、外部からの圧力に対しては、同じ共通の祖先を戴いている者は連合するという前提の下で進んでいる。同族グループ内の争いが激化したときには、なるべく多くの人達を糾合した方が有利になる場合がある。そのときには適当な過去の人物を共通の祖先と決め、それに基づいて過去を完全に作り変え、これが正統の歴史だとしてしまう。激烈な競争に対する戦略という印象が強い。

東南アジアにおける移動と、中国における固定という話も、非常に難しい問題だ。例えば80年代なかばに発表された山田賢さんの研究(『移住民の社会』名古屋大学出版会、1995年にまとめられている。)以降、中国明清史研究の中では、中国とは移動することが当たり前の社会だという見方が出されてきた。人々は流砂のように流れている。流砂の上に乗っている王朝は、それを捉えようと里甲制のような様々な制度を作っている。その有効性も限界があり、制度そのものが空洞化していく。中国の歴代王朝が固定化を強調するのは、逆に言えば、漢族の社会は移動が前提に

なっているからこそ、強調せざるをえないのだ。移動している漢族の上に乗る国家体制を作れなかったというところに、東南アジアと中国を分ける分岐点があるのかもしれない。

中国の場合、移動を含み込めながらまとめていくシステムが一方にある。典型的なのが科举制度だ。移動した先で定住し、科举を受けることによって中央にまた吸い上げられていく。このような一つのパイプを常に設定することで、中華帝国が維持されている。

おそらく東南アジアと中国の移動の問題については、国家がどのような形で人を把握するのかという、その把握の仕方に議論が展開するだろう。

阿部 中国の移動と東南アジアの移動は違うような気がする。漢族の場合は、移動というよりもエクспанションと言った方がいいのではないか。それに対し、東南アジアの方は非常に自由に動きまわる。

坪内 昔の社会では、一番上と一番下の子供の年齢差は20才ぐらいはざらにある。その場合、一世代目で既に叔父と甥が同じ年齢であることがありうる。二世代目では、祖父と孫が同じぐらいの年齢で、三世代目ではもっと大きな差が起きてくる。それに関わらず、その中に「輩分」という思想を盛り込もうとするならば、非常に範囲を限定するか、あるいはこれをイデオロギーとしてだけおいておく必要があると思う。今日の話の中では、イデオロギーとして固定化された部分を強

調されていたが、実際にはそれに隠れて操作された部分があるように感じる。イデオロギーを固定化することでは捉えられない本当の動きが、二重になってはいないか。

アジア社会学会研究会でも、中国社会における移動が問題になっていた。中国とは非常に移動のしにくい社会だと捉えられてきた。だが、実際には移動が組み込まれた社会なのだという反論が出て、今までの捉え方が覆されてきている。それにも関わらず、中国の移動はもっと悠長な時間の幅の中で行われていると私は思う。対して東南アジアは、日常化された中での移動である。このような違いがありはしないか。ただし、ゆっくりではあっても、確かに中国にも移動があると考えていいだろう。しかし、それは本当に人が一世代、あるいは一年のうちに消えてしまうような存在なのか。もう少し中国の側からの話をお聞きしたい。

立本 親族関係の類型という話になると、社会学者や人類学者は、親族関係が他の社会関係の原理として貫徹しているかどうかで区別し、さらにその親族関係そのものの質はどう違うかを見ていく。今日の話は、そういうタイポロジーではなく、親族関係をどのように使っているかという分類だった。親族関係の動詞的使い方、形容詞的使い方、名詞的使い方という、非常に斬新な切り口だ。だが、親族関係そのものの違いはどう捉えるのか。タイは具体的な二者関係、中国は輩行の序列である

とされたが、むしろそちらの類型の方が大切ではないか。

阿部さんが言う人の固定化は土地に張り付けることと、社会構造上、柔軟性がないと言うこととの二つに分けて考える必要があろう。異世代婚禁止をとってみても、ブギスでも異世代婚を忌避する傾向は見られる。だが、そういう規則を持っても、フィクションを作って逃げてしまえるようないい加減さがある。中国ではそれが強固に守られていて、それが形容詞的行動を律するのだとされた。私はそれを比較的位置関係と置き換えて考えていたのだが、これは比較的位置とは逆にナンバーリングされた絶対的なカテゴリーとして働いているという考え方もできる。

上田 実生活の中では、輩分がイデオロギーとして全面に出る場と、それを無視してもかまわない場という形で、明確に分かれていると思う。例えば重要な祖先祭祀などの場合には、輩分の序列は非常に厳密に意識される。ところが現在では、同族内だけで人間関係が完結するわけではなく、様々な組織での人間関係がある。そこではやはり組織内の上下関係が重視される。様々な状況を見極めながら、使い分けをしている。しかし、同族村落の中でいざこざが起これば、その解決の仕方には輩分的なものが織り込まれている。

輩分は純粋なイデオロギーだけではない。しかし、実生活まで完全に貫徹しているわけでもない。中国人自身の中で様々な意味で使

い分けをしているのが実状だろう。

海田 例に出されていた12世代目と13世代目とかいうのは、実際に意味を持っているのだろうか。

上田 名前の中にも織り込まれているし、そういう意識は持っていると思う。世輩の順番が全面に出てきているときは、年齢はある意味で無視される。例えば60歳ぐらいの老人が、20歳ぐらいの人に叔父さんと呼びかける場合も十分にありうる。例えば相手を罵るときに、相手の輩分を低く下げて言うことがある。輩分を敢えて意図的にずらして呼びかけることで、非常に強い社会的なメッセージ性が盛り込まれる。輩分は具体的な数字というよりも、上下関係という形で意識されている。

移動については、確かに中国の場合、移動というよりも移住という方がいいのかもしれない。何世代かを一つのセットにした移動である。中国の場合、数世代にわたる移動が一つの戦略として行われている。例えば何人か男の子がいる場合、婿入り婚のような形で、一定地域内の様々な村に散らしていく。息子達の定着の状況を見た上で、本体である親の移住する村を決める。親の移住した先の息子の家系が、その地域における同族集団の基軸になり、他の息子達の子孫達が結びついていく形になる。かなり戦略的に息子達を送り込み、一番移住に適したところを探りながら進んでいく。2、3世代をかけた、あるいは100年ぐらいのタイムスパンをかけた移動という

のは、マレー的な移動とは全く違う。

中国史の中では、今までは定住を前提にした研究がなされていた。そのために、このような移住戦略は中国研究者にとっても新しい視点だ。移住から移動へと性急な議論を展開しているところもあるだろう。「移動」とは空間的な概念だが、どれぐらいのタイムスパンかという「時間」の問題が関連してくると思う。立本 「輩分」がイデオロギーとして重要なのはなぜだろう。もちろんコスモロジーや秩序維持ということで説明された面もあるが、それがなぜ輩行なのか。輩分に似た緩い関係はどこにでもある。そういう世代秩序維持慣行が、一つの固定化したペナルティとして守られていくのはなぜだろう。

上田 イデオロギーからではなく、逆にそこに生きている人達の方から説明していく方法もある。例えば、広い範囲の人を同族として糾合したい場合は、なるべく過去に遡らせた方が有利だ。その中で、同族としてまとまる証として通譜をするが、その中に入る人達の序列を決めるために行われるという意味もある。漢族の場合、同族として認めることと、上下関係を認めることがセットになる。共通の序列体系を持たなければ、様々な混乱が生じてくる。そのためのナンバリングであり、有効な手法として「輩分」が成立してきたのだろう。

このようなあり方が出てくる背景には、やはり漢族の持つ「気」の流れという意識が関

係してくる。「気」の流れを自分の体を感じている人が漢族になる。共通の祖先から脈々と伝わり、世輩が代わるごとに枝分かれをしていく。どこで枝分かれをしたかが、上下関係を作る上で常に重要であり、「輩分」という方法を全面に押し出すようになった。

立本 東南アジアの場合は非常にいい加減とも言えるが、中国ではナンバーリングまでしている。それを形容詞と言っているのだろうか。比較級としての形容詞と言われるが、同じ比較でも、東南アジアと中国との違いがあるように見える。

応地 親族ということから、インドのヒンドゥーのことを考え合わせて聞いていた。同宗不婚はインドにも見られるところがある。ところがインドの場合には、その上にカースト内婚制がある。インドはカーストの中で秩序づけられるが、中国の場合にはカースト内婚はなく、同宗不婚の原則だけが生きている。輩分は其中で序列化するためにとった制度な

のか。

あるいはその背後に、同郷やネットワークを基にした地域的なまとまりがあり、姻族の範囲を決めていくのか。いわばカーストの内婚的なものが地域の方に転化して、同宗不婚と大地域内婚制が重なって、中国社会が形成されていると考えられないか。逆に同宗不婚で序列化するような、きわめて特殊化した社会なのか。

上田 少なくともインド的なカーストは中国にはない。もう少し狭い意味でのネットワークだとしても、たぶん見られないだろう。

応地 それに代わるものが地域ということにならないだろうか。

上田 地域の中にそういう形はあるかもしれないが、現地のタームの中では出てこない。中国人自身が実際にそれと近いようなことを行っていたとしても、意識化はしていないと思う。